

愛と殺意の津軽三味線

新装版

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	津軽三味線	7
第二章	じょんから口説き	34
第三章	あるカップル	67
第四章	津軽雪譜	100
第五章	ある風景	133
第六章	恋人	167
第七章	最後の演奏	200

愛と殺意の津軽三味線

第一章 津軽三味線

1

自宅マンションは、深大寺じんだいじの近くである。中央自動車道の下を抜けたところで、三田は、脇道へ入った。

その方が、近道だったからである。すでに、深夜に近く、人通りも、消えている。月が明るかった。その月を見ながら、歩いた。別に、飲んで来たわけでもないのに、三田は、いい気分で、鼻唄はなうたが出た。

多分、月明りのせいだろう。

何か、音がしたような気がして、三田は、足を止めて振り向いた。

そのとたんだった。

鉄棒が、三田の顔めがけて振り下された。

呻うめき声をあげて、三田の身体がくずおれた。

それに向って、第二撃が襲いかかった。

京王線つづけ丘駅で降りた時は、もうバスは、終っていた。

と、いつて、タクシーに乗るにしては、近すぎた。それに、幸い、五月中旬の夜で、暖かい。

だから、三田誠次は、自宅マンションまで、歩くことにした。

甲州街道を渡る。

明るくなつてから、新聞配達の青年が、死体を発見した。

殺人事件ということで、警視庁捜査一課の刑事たちが、現場に急行した。

被害者は、運転免許証から、三田誠次、三十五歳と、判明した。

住所は、深大寺東町×丁目のRマンション。倒れていた場所から、目と鼻の距離だった。

彼の顔は、血だらけで、右眼は、眼球が、飛び出している。後頭部にも、何ヶ所も殴られた痕があった。

犯人は、鈍器で、めった打ちにしたのだろう。

検死官も、死因は、脳挫傷のせいだろうといひ、死亡時刻は、昨夜の午後十一時から、十二時の間ではないかと、いった。

「財布は盗られていません」

と、西本刑事が、十津川に、知らせた。

「この近くで、最近、強盗事件が、三件も起きているそうです。狙われたのは、東京都心に勤めるサラリーマン二人と、OLが、一人です」
と、日下が、所轄署から得た情報を、十津川に、報告した。

「容疑者は、浮んでいるのか？」

「それが、いろいろな噂があつて、はっきりしていません。中年男だという噂もあれば、少年の二人組だという話もあります。いずれも、いきなり、鉄棒で殴りかかつて、氣を失った相手の財布を奪うというやり方で、被害者は、はっきりと、犯人の顔を見ていません」

「三人の被害者だが、死んでいるのか？」

「いえ。重傷者一人がいますが、三人とも、命に別状はありません」

「じゃあ、今回初めて、死者が出たのか」

「そうです」

「同一犯の犯行ですかね」

亀井が、いった。

「激しい抵抗にあい、初めて、死者を出したのか、全然別の犯人か、どちらかということだな」

と、十津川は、いった。

死体は、司法解剖のために、東大病院に送られた。

刑事たちは、被害者の三田誠次について、調査を進める一方、現場周辺の聞き込みを開始した。

西本と日下の二人は、三田の住んでいたRマシオンに足を運んだ。

十二階建の803号室が、三田の部屋だった。

2LDKの部屋で、かなり広い。

三十代に入って、まだ、独身の三田が、独身生活を楽しんでいたことは、部屋の模様からも、うかがうことが出来た。

夏には、水中ダイビングを楽しんでいたらしく、ダイビングスーツや、水中カメラなどがあつたし、駐車場には、休日に乗っていたという、国産のオープンカーも、とめてあつた。

パソコンを見ると、女性のメール友だちが、何人かいたことがわかる。

三田が、勤めていたのは、四谷に本社のあるKという製薬会社だった。

今の時代に、あまり、影響を受けない会社の一つだろう。現に、Kの株価は、安定している。その会社の販売第一課の課長補佐だった。

Rマシオンは、賃貸ではなく、三田が、所有していて、最近、二百万円かけて、リニュー

アルしていた。

「かなり、いい生活をしていたんだな」

と、西本は、いった。

二人の刑事は、管理人に、三田のことを聞いた。

「明るくて、いい人でしたよ」

と、管理人は、いった。

まあ、半分は、お世辞だろう。

「ここに、女性を連れて来たことがありますか？」

と、西本が、きいた。

「何度か、見えましたよ。背の高い、二十五、六の女の人で、会社の同僚だと三田さんは、いつていましたね」

と、管理人は、いう。

「結婚相手ですかね？」

「いや、三田さんは、当分、独身でいくみたい
なことをいつてましたね。独身が、自由でい
つて」

と、管理人は、ちよつと羨ましうらやそうな顔をし
た。

部屋からは、銀行の預金通帳も、見つかった。
それに書かれていた金額は、五百万円余りだ
つた。

三十五歳で、自分のマンションに住み、五百
万円の預金があれば、豊かな方だといつていい
だろう。

問題は、彼に、敵が、いたかどうかというこ
とである。

三田を、殺したいほど、憎んでいた人間がい
れば、物盗りの犯行とだけは、限定できなくな
ってくるからである。

西本と日下は、それを知りたくて、部屋の中を、徹底的に、調べた。

まず、手紙である。

脅迫めいた手紙が、届いていないか。

しかし、手紙そのものが、殆ど無かった。最近の三十五歳、独身の男は、手紙のやりとりをしないのか。

三田は、ホームページを持っていたので、それを、調べてみた。

三田が、使っていたインターネット上の名前は、「まこと」だった。誠次の誠からとったのだろう。

「まるで、子供だな」

と、日下は、笑った。

よく、メールを交換していた女性は、三人。

もつとも、この三人が、全て女性かどうかは

わからなかった。

この三人とのやり取りは、ご丁寧ていねいに、コピーされ、残してあった。が、殺人を予想させるものは、見つからなかった。

「三田さんは、北国の生れですか？」

と、西本が、管理人にきいたのは、メールのやり取りの中で、「ボクは、北国の生れだから——」と、書いていたからである。

「岩手の生れだということは、聞いたことがありますね」

と、管理人は、いったが、

「しかし、もう、身寄りが、誰もいなくて、帰ったことはないよ、いつてましたよ」

とも、いった。

西本たちは、三田が勤めていたK製薬本社に向った。

最近、新しい抗ガン剤を開発したという話があつて、株価が、はね上っている。

三田の直接の上司である井上という販売第一課長に会った。

まだ、事件のことは、公おおやけになつていないから、井上課長は、三田が殺されたと話すときをかくさなかつた。

「信じられませんよ。昨日、あんなに元気だったのに」

と、いう。

「昨日、三田さんは、会社が、終つてから、何をしていたかわかりますか？ すぐには、帰宅

していませんが」

と、日下が、きいた。

「ひよつとすると、中野クンが、知っているかも知れません」

と、井上はいい、長身の若い女性社員を、呼んでくれた。

「どうやら、マンションの管理人が話していた女性らしかった。」

名前は、中野麻美。

日下が、三田のことを聞くと、あっさりとして、「昨日は、私のマンションに寄つて行きました」

と、いった。それから、眉をひそめて、

「何かあつたんですか？」

「昨夜おそく、自宅近くで殺されました」

「——」

麻美は、言葉を失って、俯うつむいてしまった。

西本が、彼女を、励ますように、

「われわれとしては、何としてでも、犯人を見
つけ出したいのです。動揺されているとは思
いますが、何とか、犯人逮捕のために、協力し
て頂きたいのです」

と、話しかけた。

麻美が、顔をあげた。

「なぜ？ なぜ、殺されたんですか？」

麻美が、叫ぶように、いった。

「物盗りの犯行かも知れませんが、物盗りに見
せかけた殺人の可能性もあります」

と、日下がいった。

「あなたに、何か、心当りでもありますか？」

西本が、きいた。

「そんな、心当りなんか、全くありませんけど

——」

「三田さんに、敵はいませんでしたか？」

西本が、きく。

「いいえ。三田さんは明るい人で、他人ひとに恨ま
れることなんかなかったと思いますけど」

と、麻美はいった。

「しかし、誰か、いるんじゃないませんか？」

西本が、しつこく、きいた。

課長の話も、麻美の話も、信用できない気が
していた。

だから、本当のことを、ぜひ、知りたいのだ。
他の人にも会って、話を聞きたい。特に、三田

に好意を持っていない人間の話を聞きたいのだ。

「この会社で、三田さんのライバルと呼べる人
はいませんか」

と、西本は、課長にきいてみた。

「そりゃあ、ライバルはいましたよ。何処どこの会社だって、ライバルはいるでしょう。しかし、その人間が、三田クンを殺すなんて、とても考えられませんよ。殺したって、何の得にもなりませんからね」

と、課長は、いった。

「しかし、三田さんが死ねば、ライバルがいなくなるんだから、喜ぶ人間もいる筈でしょう」
 「課長補佐の椅子が、一つ空けば、誰かが、そこに座って、新しいライバルが生れるんです。その人間が、三田クンより力があつたらどうするんです。それに、うちの会社が、得意にしている胃薬品のシェアは、八〇パーセントで、ノルマは必要ないんです。あくせくしなくても、売れるんです」

と、課長は、いった。

「それに——」

と、課長は、説明した。

「サラリーマンには二通りあると思うのですよ。とにかく、仕事に精出して、力をつけ、同僚を追い抜いていく。もう片方は、出世より、現在の生活を楽しむ。三田クンは、後者の方で、三十五歳の独身生活を、楽しんでいましたね。夏になると、ハワイに行っていましたよ。そういう人間だから、同僚から警戒されることもありませんでした。従って、恨まれることもなかったと思いますよ」

と、いった。

念のために、二人の刑事は、三田の同僚たちにも会って、話を聞いたが、課長の言葉が、裏書きされた。

二人の刑事は、この結果を、十津川に、報告した。

「少くとも、会社の中に、三田の敵は見つかりませんでした。出世よりも、人生を楽しむ種類の人間だったと思います」

と、西本はいった。

「この不景気の時代に、羨ましい生活をしてい
たんだと思います」

と、日下も、いった。

すでに調布警察署に、捜査本部が、設けられていた。

その中で、十津川は、集まってくる情報を、一つずつ、検討していた。

西本と、日下の報告も、その一つだった。

(これで、少し、物盗りの線が、強くなったな)
と、思った。

現場から、凶器の鈍器が見つければ、もっとはつきりするのだろうが、それはまだ、見つかっていなかった。

聞き込みには、四人の刑事が、当たった。

三田村、北条早苗、田中、そして片山の四人である。

事件そのものが、深夜に起きているために、殺人の目撃者は、見つからなかった。

ただ、三田を見かけた人が、皆無だったわけではなかった。

同じ時刻に、京王つじヶ丘駅で降り、同じように、バスが無くなっていたので、歩いて、自宅へ帰った人間もいた。

東京都庁に勤める白木茂、四十歳も、その一人だった。

彼は、甲州街道を渡ってすぐの所に、自宅が

あつた。そこまで、白木は、自分の眼前を、三田が歩いてゐるのを見ていたと、いう。

「時刻は、十四日の午後十一時四十分頃だつたと思ひます。間違ひなく、亡くなつた方だと思ひます。ご機嫌で、鼻唄を歌つていましたよ」と、白木は、いつた。

白木の証言する男の服装は、三田と同じもので、間違ひなく、三田誠次だと、十津川は、断定した。

奇妙な証言もあつた。

現場は、小公園の中なのだが、その近くに建つマンションの二階の住人の証言だつた。

証言者は、北野ゆみ、十九歳。

浪人で、都心の予備校に通つていた。

あの夜も、受験勉強をしていたのだが、疲れで、窓を開け、夜気を入れたという。

「月が、きれいだったもので、ぼんやり空を見てました。そうしたら、公園の方から、三味線の音が、聞こえたんです」

と、ゆみが、いう。

「三味線ですか？」

早苗は、聞き返した。

あまりにも、殺人事件にふさわしくない呑気な言葉に、思えたからである。

「ええ。三味線の音です。津軽三味線」

と、ゆみは、きつぱりと、いつた。

最近、津軽三味線が好きになつて、受験勉強の合い間に、そのCDを聞いているのだといひ、それを、かけてみせてくれた。

「津軽三味線が、聞こえたのは、何時頃ですか？」

と、早苗はきいた。

「確か、十一時五十分過ぎ頃だったと思います」

と、ゆみはいう。

「それは、どんな風に聞こえたんですか？」

「窓を開けて、夜空を見ていたら、突然、聞こえたんです。それで、『あらッ』と思って、公園の方を見たんです」

「何か見えましたか？」

「いいえ。木が邪魔になって、何も見えませんでした。それに、三味線の音はすぐ、止んでしまったんです」

と、ゆみは、いう。

「津軽三味線って、静かな調べのときと、激しい調子のときとあるでしょう。そのどっちに聞こえましたか」

「私には、静かに、哀調を帯びて聞こえました。

ただ、あの時は、私は、月を見ていて、感傷的な気分になっていましたから、そのせいかも知れません」

と、ゆみは、いった。

十津川は、この報告を重視した。が、事件に關係があるかどうかの判断は、簡単には下せなかつた。

最近、津軽三味線は脚光を浴びていて、CDも、よく売れているから、犯行の時間帯で、近くに住む人間が、そのCDをかけていたかも知れなかつたからである。

それなら、津軽三味線の音は、事件とは、關係がないことになってしまふからだった。

十津川は、なお、聞き込みを、続けることを、命じた。

結局、事件が起きた時間に、津軽三味線の音

を聞いたのは、この女性だけだった。

十津川は、こう結論を下した。

「北条刑事が聞き込んだ、津軽三味線の話だが、今のところ、事件に関係があるかどうかは、不明だ。もし、関係があるとすれば、犯人特定の、大きな手がかりになるので、引き続き、聞き込みを続けて欲しい」

3

一週間たった五月二十一日の夜。

板橋区にあるアパートの近くで、殺人事件が、起きた。

このアパートは、「アサヒコーポ」という名前がついていて、六部屋がある。

駐車場は、隣接していなくて、歩いて、五分ほどのところにある空地に、「アサヒコーポ駐

車場」の看板が出ていた。

このアパートに、一年前から住んでいる、二十八歳の沢田あきは、いつものように、駐車場に、車を入れた。

ただの空地で、ルーフもなく、管理人も置いてないのに、一台分、月一万三千円の駐車代をとられている。家主は、相場から見れば、安いというが、あきは、ただの空地に、一万三千円は高いと思っていた。

とにかく、不用心なのだ。先日も、他の車が、夜中に、車上荒しにあっていた。

だから、今夜も、何もかも手に持って、車を降り、キーをかけた。

その時、何か、音が、聞こえた。

それは、三味線の音みたいに聞こえた。

(何なのかしら?)

と、いう感じで、あきは、振り向いた。その瞬間、いきなり、鉄棒が、振りおろされた。

声も出さずに、彼女の身体は、その場に、崩れおちた。その顔に、二度、三度と、凶器が、振りおろされていく。

日が変わって、午前一時過ぎに、十津川たちは、現場に駆けつけた。

死体は、警ら中の警察官が、発見した。

初動捜査班の刑事が、十津川に、事件の概略を説明した。

(よく似ている)

と、十津川は、思った。

だからこそ、十津川たちが、呼ばれたのだらう。

ハンドバッグの中から、財布が、見つかった。

そして、十津川が、注目したのは、初動捜査

班の刑事の次の言葉だった。

「この駐車場に接して、雑居ビルがあるんですが、その中にあるラーメン店で、店が終了し、後片付けをしていたんです。あの窓が、その店です。そうしたら、三味線の音が、この駐車場から聞こえたというんです」

「それは、津軽三味線の音じゃないのかな？」

と、十津川は、きいた。

「そうです。それで、店員は、駐車場で、誰かが、深夜、練習をしているのかなと、思ったそうです」

「窓を開けて、見たのか？」

「いえ。すぐ、三味線の音は、止んでしまったので、見なかったと、いっています」

「時刻は？」

「十一時五十分頃で、犯行があったと思われる

時刻と、重なっています」

と、いった。

「偶然の一致ですかね？」

亀井が、首をかしげていた。

「かも知れないし、犯人と、関係があるのかも

知れない」

十津川は、あくまでも、慎重だった。

「とにかく、被害者のことを、よく調べてみよう」

と、十津川は、つけ加えた。

西本と日下の二人が、被害者の住む「アサヒコーポ」に、向った。

二階建の201号室が、被害者沢田あきの部屋だった。

六畳、三畳の二部屋に、バス・トイレつき、それに、小さなキッチンがある。よくある間取

りだった。

部屋の中を調べながら、管理人の話聞いた。

「沢田さんは、独身で、いろんな仕事をやってきたみたいですよ」

と、管理人は、いう。

「つまり、フリーターということですか？」

西本が、きいた。

「ええ。ただ、パソコンが出来るので、最近は、それを使う仕事をやっているんだと、いっていいましたね」

なるほど、六畳の部屋には、パソコン、プリンター、などが並んでいる。

それに、デジカメと、ビデオカメラ。

刑事の一人が、最近、作ったと思われる名刺を見つけた。ケースに入っていて、殆ど、減っていない名刺で、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。